



俳優

野元学二さん

かつて朝日新聞の「ひと」欄で、弁護士をやめて役者になったと紹介された人がいる。その人は弁護士登録9年目で役者の道を選んだ。

ぜいたくな人なのである。司法試験に早く合格し、渉外事務所等で勤務し、弁護士の妻を持ち、子宝に恵まれた。潔癖な人である。他人からはうらやまれる人生でありながら、多忙な日々の中でも、自分の心の声を聞き続ける。真摯な人でもある。自分を問うことをやめず、その結果の新たな選択を、果敢に、しかも自然体で実行できる。

野元学二氏はそういう人である。

(聞き手・構成：味岡 康子)

—俳優さんという呼び方と役者さんという呼び方のどちらがお好きですか。

あまり呼ばれ方にこだわりはありません。自分で使う場合は役者という言葉の方が多いかもしれないです。

—大学は早稲田（法学部）ですね。どんな学生生活でしたか。

まじめに法律の勉強をしていました。受験勉強一辺倒というわけでもなく、旅行をしたり遊んだり、充実していました。

—司法試験は早くに合格されましたね。

自分では4年生在学中に受かりたいと思っていたので、2年余計にかかったという感じですが、当時の年齢層からすると早い方だったでしょうか。

—法曹三者のうち、弁護士になろうと思われたのは？

修習制度があるのだから、法曹三者すべて直接触れてみて判断しようと思っていました。多様な仕事の在り方があり、依頼者に近い弁護士が一番自分にあっていると考え、弁護士に決めました。

—47期の修習生時代はどうでしたか。前半が湯島研修所、後半が出来たばかりの和光という時代でしたね。

給料をもらって勉強させてもらい、多くの法曹の先輩と深く触れ合い、実務経験をさせていただいて、楽しい生活でした。特に、湯島の地は最後の期ということもあって思い出深いです。

—勤務弁護士時代の仕事の内容は？

約9年間にわたり3か所の法律事務所勤務しました。最初が渉外系で、2番目が国内の法律事務所、3番目がアメリカの法律事務所の東京オフィスです。渉外事務所でも一般の刑事・民事事件も受け持ちましたし、幅広い内容を扱っていました。

—ご結婚はいつごろですか。

弁護士1年目の終り、28歳の時でした。

—弁護士をやめようかなと思いはじめたのは何年目くらいですか。

最後の1年くらいでしょうか。

—やめる思いが先ですか、やりたいことがあったのが先ですか。

弁護士の仕事の大体のアウトラインが見えてきて、その中でどういうタイプの弁護士として、より仕事や生活を深めていこうかと考える時期でした。いろいろ

自分を含めた人間を深く知りたい、
人との触れ合いを根っこからつかみたい——。
弁護士より役者の方がより自分にとって
ストレートだということでしょうか。



考えましたが、弁護士という肩書きを取っ払ってもいいじゃないかというのも選択肢の一つでした。

——それって、やりつくしたという思いですか、それともより自由になりたいという思いですか、または新しい分野に一目ぼれしてしまったという感じですか。

やりつくしたというものではないですね。一目ぼれでもない。弁護士の仕事の延長上に役者の仕事があるという感じでしょうか。弁護士としては、人と人の触れ合いの中で自分も成長できるし、社会に貢献できるかなという気持ちがあったけれども、何かもう一つ壁のようなものがあり、なかなか事件処理というだけでは納得できないものがあつた。結局、日々の仕事や生活を通じて未熟な自分がより成長したい、そのために自分を含めた人間を深く知りたい、人と人の触れ合いや関係を根っこからつかみたいという思いです。もともと芝居が好きだということもあつたでしょうが、もっと自分を掘り下げて理解し、他人を理解したかつたし、そのためには、弁護士より役者の方がより自分にとってストレートだということでしょうか。

——弁護士をやめて養成所で2年間勉強されましたが、ご苦労されましたか。

養成所は終了しましたが、今でも演技のトレーニングは続けています。見た目よりも地道で精神的にきつい仕事ですが、やりたかつたことなので苦労とは思いません。

——今後はどのような方向に向かわれるのですか。

法律家の仕事もそうでしょうが、演技も死ぬまで勉強だし、これで満足というのではないのだろうと思っています。遠く険しい坂道を楽しみながら一歩ずつ登っていければいいなと思います。

——好きな俳優、映画、小説など教えてください。

自分の見る目や感性もいろいろ変化していくので、あまりこだわりを持たないようにしています。これまで特にいいなと思ったのは、志村喬、宮口精二、アル・パチーノ、映画は黒澤明監督の「生きる」、小説は夏目漱石や坂口安吾の作品などです。

——裁判員制度が始まります。その広報のためのフィルムをごらんになりましたか。

最高裁が作ったものを見ました。あのよううまくいけばいいけれど、最初は大変だろうなと思いながら見ていました。いきなり重い事件にあたるのはつらいですね。

——映画「それでもボクはやってない」に出演されましたね。

実はセリフのある出演シーンはカットされてしまつたのですが、裏方でも参加しました。周防正行監督の刑事裁判はおかしい、という素朴な感覚を作品に仕上げる情熱と感性はすばらしいと思いました。

——奥様も弁護士さんですね。妻、4人のお子さんの母親、弁護士という3役をこなしていらっしゃるのか。

はい。一番身近な存在で、大事なパートナーであり、いろいろな意味で勉強させてもらっています。

プロフィール もと・かくじ

1967年東京生まれ。早稲田大学法学部出身。1992年司法試験に合格(47期司法修習修了)。9年間の弁護士業務のち、35歳で俳優となることを決意。俳優養成所を経て、映画『THE WINDS OF GOD』のオーディションに合格し、デビューする。2005年には『容疑者室井慎次』、最近では『それでもボクはやってない』『HERO』に出演。また、舞台、テレビドラマなどでも幅広い役柄で出演するほか、作品の法律に関する監修、法廷場面での演技指導にも携わる。